無数の扉の向こう側に世界はない
菅亮平 “Endless Gallery” について

クリスチャン・ハルタルド

かつて美術館を訪れた人には、選択肢が二つあった。ひとつは絵画を見ること、もうひとつは窓から外を見ることだ。外の方が面白いこともあれば、絵画の方がきれいだったり、幻想的だったり、或いは現実より現実らしいこともあった。しかし、基本的には窓枠と絵画の額縁の中に同じ世界を常に見出だしていたのである。確かにアルベルティは、1435年に自らの芸術論である「絵画論」において、絵画を開いた窓に見立て、その窓を通して世界を見た（そして我々は、アルベルティと共に世界を見ることになる）。後にフェルメールやカスパー・ダヴィド・フリードリヒの絵画の中に描かれた窓は、現実と描かれた現実の緊張関係を反射的に映し出すだけでなく、作り上げられた、しかし　芸術を通していつでも垣間見ることのできる世界を喩えたものであった。鑑賞者は芸術を通すことにより作りあげられた別世界にいつでも接することができたのだが、モダニズムとともに美術が自律化、抽象化の道を辿ったことによりこれは不可能になってしまった。外部を遮断する現代美術館の “ホワイトキューブ” は、正に判断基準となる文脈を自ら提供する自己完結した芸術の象徴と言えよう。この美しいクリーンルームは閉ざされたリファレンス空間であり、そこでは芸術が芸術としてのみ存在すること ーしかし、日常生活とは隔離されていることが保証されている。

菅の “エンドレスギャラリー” では、この状況が絶対的なものに高められている。カメラは、互いに入り組んで並んだ部屋から創造される混沌の中を、ストイックにゆっくり動いて行く。視線は、ネオン管灯で灯された通路を手さぐりで進み、ドアからドアへと壁の白い表面や細かい表情を持つ床の上をすべって行く。すべての空間には、空間以外何もない。想像の世界へいざなう絵画は何ひとつないし、現実の世界に通じる窓もない。部屋の無菌の空間に感じられるのは、刑務所や病院等の施設で見られるようなつかみどころはないが規律をもたらす暴力的な支配だ。空間自体が、訪問者、患者や入居者を待っているのかのようだ。故に、”無限に続くギャラリー“ は、ユートピアであり、同時にディストピアでもある。独自の現実を生み出しながら、そのために自分以外の世界からは孤立している芸術の自律性について語っている。

“ホワイトキューブ” に対する批判的な寓話とも言える菅の作品が言及に値する点は、逆説的ではあるが正に自らが批判・再現している条件内で機能しているというだけではなく、作り上げられた世界である映像がいつの間にか現実世界へ滑り込んでいるということであろう。それは、鑑賞者が実物大以上に投影された映像空間に文字通り引き込まれていると感じる時、歩いているときのカツカツと刻まれるリズムや壊れた蛍光管の神経質なブンブンする音が頭に焼き付けられるように残る時、カメラの揺れ、パンショットや急な方向転換や曲がる時の旋回の動きで自分がどこにいるのかわからなくなり、まるで乗り物に酔ったように感じる時。そして、その空間の中で動いている見えざる存在、それは実は自分たちなのだ、と気づく時である。

菅の迷宮のような映像の中で我々が通り過ぎるドアのいくつかは、閉ざされたままだ。ドアは更に分かれていって、終わりのないループに入りこんでいくのだろう　ー　或いは、ドアは現実世界への非常口かもしれない。いずれにせよ、私たちは正しいドアを探し当てなければならないのである。

独日訳　笹貫恵利子